正宗白鳥全集

第一卷

小說一

新潮社版

正宗白鳥全集　第一卷

昭和四十一年十月三十日　發行
昭和五十一年八月三十日　セット版

全十三卷セット定價五二〇〇〇圓

著者　正宗白鳥
發行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式會社
製本所　新宿加藤製本
發行所　株式會社　新潮社
162 東京都新宿區矢來町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四一一
振替　東京四—八〇八番

© Yuzō Masamune Printed in Japan 1966

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集　第一卷

監修

河上徹太郎

小林秀雄

中村光夫

山本健吉

編集

中島河太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一卷　目次

寂寞……九
塵埃……二八
妖怪畫……三五
玉突屋……四五
何處へ……四八
五月幟……九七
村塾……一〇九
二家族……一二五
明日……一七三
命の綱……一九四
地獄……二〇〇

悪縁……二一九
落日……二五三
名残……三三三
徒勞……三四〇
微光……三六三
波の音……四〇三
泥人形……四一三
口入宿……四四九
窒息……四五八
解題……中島河太郎……五〇一

小說

(一)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

寂寞

一

「左の端に兵營と思しき巍々たる建物の半ばをあらはし、右には二三の人家の上に十字架を頂ける三角形の屋根がぼんやりと聳えてゐる。これを背景として、中央に古びた帽子を不恰好にかぶり、古軍服の二本の赤筋の一つは稍ゝ落ちかゝつてゐるのを着て、小さやかな風呂敷包をかい抱き、稍ゝ前に屈んで、煤ぶつた顏で兵營の方を見てゐる。後には赤毛布を顎までかぶつた田舍爺と、鹿爪らしい二十餘歳の男が續いてゐる。二三人の小兒が片隅にあつて、うれしげに何をか叫んでゐるやうなのや、片足上げて飛び出しさうなのや、小さい日の丸の旗を振つてゐるのもある」

青年は背景の兵營の甍を幾度も〳〵薄墨でなすくつた後、ほつと息を吐いて、繪筆を繪具皿の上に置いたが、筆の雫の疊の上に垂れるのを見もやらず、坐つたまゝ心持ほど後退りして、繪絹を見つめて暫し餘念はなかつた。やゝあつて首を一捻り捻つて、何氣なく刷毛を取上げたが、又口の內で呟いて下へ置いて、「どうも左の腕が堅くつていかん。」と獨言ち、頻りに下唇を嚙みしめてゐた。

格子戸の開いて、誰れかが老婢と喋舌つてゐるのをも耳に入れず、繪が絹を拔け出て眼に入つてしまひはせぬかと思はるゝ程一心に見詰めてゐたが、間もなくゆがんだ襖が手荒く開いて、

「どうだ、出來たか。」

張り裂けさうに肥つた黑い顏が肩越しに窺くので、やうやく振返つて、痩せた顏に淋しい微笑を浮べた。

「畫くことは畫いたのだが、どうも思ふやうにならん。これではとても出せんから、もう四五日待つて呉れ玉へ。」

「これなら結構ぢやないか。さう君のやうに氣にしてもつまらないよ。豫定通り、もう昨日から開けてゐるのに、まだ出品畫は三十にも滿たんので弱つてゐるんだ。今日中に是非屆けて呉れ玉へ。」

肥滿せる男は腰を下して、隅の方の火鉢を引寄せて、片手

を懐から出して、灰を掻廻したが、火の氣もない。
「こりやひどい。いくら美術家が貧乏だつて、この寒いのに炭まで儉約しなくたつてよからうのに。おい〳〵老婢さん、少し火種を戴きたいね。」
痩せた男は暫らく首を傾げて、自分の膝と繪絹とを更る更る見てゐたが、ふと振向いて、
「君、湯本の畫題は何だつけね。」
「例の初陣だ。あれも明日あたり出來上る筈だが、今度の呼物は、つまり君のと湯本のとだらうよ。他の奴は間に合はせの一夜造り計りだからね。」
「どうだ、初陣はうまく出來てるかい。君は下圖を見たのだらう。」
「むん、彼れも平常よりは苦心してるやうだ。それに思ひ切つたことの遣れる男だから、兎に角人の注意を引くだらう。」
「さうだ。湯本は自信が強くつて、決斷力があるから、何事にでも成功する。僕なんかどうもあれ丈大膽にやり得ない。」
「でも、君は湯本のやうに誤魔化しをせんからいゝ、あまり大事を取り過ぎる弊はあるけれどもね。」寒さうにがた〳〵身體を動かしてゐる。
老婢は柄の拔けさうな十能に火を一杯盛上げて來て、
「今年は何てまあ、何時までもお寒いんですかね。……おやおや消えつちまつてるぢやありませんか、私が炭をつがなければ、何時でもかうなんですよ。消えるまで打棄つてお置きなさるんだもの。」
「けれども感心だよ。寒いのも忘れて畫いてるんだから。」
「さうですね。何かお畫き出しなさると御飯もろく〳〵食上らんで、一心にお成りなさるんですよ。今度ももう五六日はちつとも外へお出なさらんで、朝から晩までかうやつて在しやるんですよ。」
「僕なんか生れ變つたつてそんな眞似は出來んよ。」
老婢は一つ〳〵丁寧に火を移して卷煙草の吸殼を拾ふ。肥つた男はぢつと其れを見ながら無駄口を叩いてゐる間にも、痩せた男は尙色褪せた唇を微動せて、眼は繪絹を離れないのである。
「いくら苦心したつて、僕にはこれ以上畫けんのだ。」もう諦めたといふ風で、姿勢を直して火鉢の方へ寄つた。風は障子の隙間から吹込んで、散亂せる紙片を動かす。
「苦しんで畫いたつて、其丈に見て呉れる者はないんだから、展覽會に出すのもつまらないよ。我々の作も極めて拙いけれど、これでも全力を盡してるんだからね。社會はも少し同情を以て見て呉れてもよささうだと思ふが。」
「又不平か。社會が同情しようとすまいとどうでもいゝぢやないか、畫く丈畫いて賣れる丈賣つて、飲める丈飲めばいゝんだ。君のやうにさう齷齪してるのは馬鹿々々しいよ。まあ

僕にでも習つて呑氣になり玉へ。」

「僕はとてもそんな氣になれない。この繪が成功しなければ美術家は廢業しようと思ふ。僕は或は天才がないのかも知れん。天才のないのに、繪を畫いてるなんて全く無駄骨折りだからね。」

「まあ落膽し玉ふな、今に浮ぶ瀬もあるさ。……それにね、この展覽會には湯本がうまく說付けてあの番町の大村に五六枚は買はす筈になってるんだ。又大村といふ奴富豪に似合はん、妙に繪の趣味を持つてるさうだ。尤も一つは美術家の保護とか、奬勵とかいつて高尙ぶりたいんだらうが。」

「それで湯本が運動したのかい、彼れは人を說込むことが巧いからね。畫家だつてあの調子でなくつちや、世渡りは出來ん。」

「さうだ、彼奴誰れに對しても、うまく相手の呼吸を呑み込んでかゝるからな。女にだと殊にさうだ。君は何時も超然としてるから知らんだらうが、湯本が淸香を一擒一縱して奔命に疲らしてゐる有樣は見物だぜ。」少し氣色ばんで乘出し、

「昨日も水野と加藤と僕とで彼女を相手に飲んでたのだがね。水野が湯本の話を揑造して何とかいふと、あの莫連女が顏色まで變へて問ひかけるんだ。それは實に面白いことがあつた。」と獨りうれしげに話し出すと、瘦せた男はいやな顏をして、

「おい君、そんな話はもう御免だ。君や水野に遇ふと二口目には女の話をする。僕はもう聞飽いたよ。一體美術家といふものはそんなに女にのろい者か知らん。誰れも彼れも女さへ見れば、夢中になつてるが、其れでよく眞面目に繪が畫けるのが不思議だ。」

「情ないことをいふ。我輩何も女に現を拔かしてるんぢやないが、君のやうに繪絹に釘付になつてゐなくつたつてよい。それは君の勉强にも感服してゐる。今の美術家中に君程自分の職業に忠實な人は稀なんだ。いや或は全く例がないかも知れんさ。だが、さう熱中して脇目も振らんのも……美術家としては其れが理想かも知れんが、……人間として決して圓滿な生涯でもないと思ふね。鹿を逐ふ獵師山を見ずといふが、さう急つてばかりゐたつて獲物が手に入るとは限らない。まあ折々は煙草でも吸うて、山の景色を眺めるのもいゝぢやないか。紅葉も美しからうし、秋草も咲き亂れてゐるだらう。世の中を渡るんだつてその通りだ。君のやうに名譽を追うて一心不亂になるのも度が過ぎては、只自分の一身を破滅するに留まるかも知れんて。人間といふ者は、何も自分の理想とした仕事を完全に仕遂げなければ、幸福のない譯でもなからう。酒も飲むさ、女の話もするさ。其の日〳〵面白く送つて居ようなら、何時の間にか目的も達せられようし、獲物も獲られようよ。第一世の中を愉快に渡る丈得だ。僕や水野のや

うに、譯もなくのらくらしてるのは無論よろしくない。それは僕だつてよく知つてゐる。しかし君の猪武者もあまり褒めた話ぢやないからね。」何時に似げなく眞面目に說いて、薄い髯を仔細らしくひねる。相手は暫し默つて聞いてゐたが、

「君なんかさうだらう。呑氣にしてゐて目的も達するのだから結構だ。人間はそれが處生術の最上であらうが、僕は心に其丈の餘裕がないんだ。」少し俯目になつて、無心に火をかきまはしながら、

「湯本は感心だ。毎日遊んでゐて、それであれ丈の立派な腕を養つてるんだからな。して見れば矢張僕に天才がないんだ。美術に從事したのは一生の誤であつた。」

「若い癖にさう女々しく落膽し玉ふな。何時か君の力量も認められるさ。」といひさして、吸ひかけたピンヘツトを灰の中へ突込んで、「今日はこれからまだ二三人訪ねなくちやならんのだから失敬しよう、君も散歩旁々何處かへいつてはどうだ。僕は梶村と川田の家へ行くんだから。」

「いや、僕は中野から借りて來た不動の圖を模寫しなくちやならんのだ。まだ二三日は外出はしない。」「よくそんなに根が續くね。」身を起して、「ぢや其れは車夫にでも持たせて、今日中に會場へ屆けて吳れ玉へ。あ、それから七日が君の當番だよ。いやだらうが、まあ會員の義務として出て吳れ玉へ。」威勢よく出ていつた。後に澤谷信一は再びかの製作を襖にもたせかけて一間程隔たつて正座し、瞬きもせず見詰めたが、又眼を閉ぢて默想に耽つた。溜息ついて又繪を見る。我知らず繪筆を取つて座をすゝめたが、又手から辷り落して考へ込む。何故かう思ふやうに筆が働かんのだらう。色彩も自由に出ないのだらう。湯本の作だつて左程よくはない。北川のだつて隨分拙劣だが、彼等は何の苦もなく畫き上げるのだ。平生遊んでて急拵へに叩き上げて、あれ丈に畫けるのだから感服だ。自分は健康を害する迄に苦心して、纔かにこれ位の物しか出來んのだ。去年の展覽會の『無情』も二月の間全く風呂にも入らないで畫いたのであつた。繪具で畫いたのぢやない、全身の血汐で畫いたのだ。やうやく出來上つた時は、眞靑で身體に血の氣はなかつた程だ。それすら審査にも僅かに銅章を取つた計りで、世人も同輩もさ程に見ては吳れなかつた。其の時は自分は不平で〳〵、天才は凡俗に解せられないと落膽したが、今から思へば、世人に眼がないのぢやない。自分に眼がなかつたのだ。これなぞは幾ら贔負目に見ても、何處に人並勝れた特長があらうぞ。毎歲々々少しの進歩もあらはれねば、少しの發明もないんだ。小學校にゐた頃、譯の分らぬ田舍教師に煽られて、つい自惚れて一世畫家とならうと思うたのが、不運の始りであつた。自分は金を得ようとも思はん、贅澤な生活をしようとも望まん。十年近い苦學は只一幅にても自分を滿足させ、世人を動かすやうな大

作を造りたいばかりである。その指で名畫が畫けるものなら指も切らう。自分の生命を拋てば不朽の繪の成るものなら、五十年の壽命も何惜しからう。繪絹の中に投げ込んで、滿足して瞑目するであらうのに、こんな者を百枚千枚畫いたつて何にならうぞ。沙の上に苦しい目をして徒書したと同樣だ。波が寄せれば跡方もなく消えてしまふのだ。

丹や青や黑い汁に汚れた指を白い齒で嚙み碎くやうにして、凄い目を一點に据ゑて考へてゐたが、やゝありて半ば振向いて、

「老婢さん〳〵。」

と急しく呼んだ。老婢は一心に拾ひ讀みしてゐた女俠お兼といふ講談本を下へ置いて、目鏡を中に挿んで、

「お呼びで御座いますか。」

「一寸來てお呉れ。……これを見て貰うんだ。どうだよく出來てるか、拙けりや拙いと遠慮なくいつて呉れ。」

「私なぞに分るものですか。」老婢は一寸見たばかりで、別に感動する風でもなかつた。青年の顏は不滿の色を帶びる。

二

幾度か追ひのけられた春の女神もやうやく冬の荒神に勝ち了せて、溫かき光は隈なく大地を包んでゐる。數日間の寒空に引籠つてゐた人々も、身體ののびやかになる心地して、道行く人の顏付も生き〳〵してゐる。上野は春の先驅して、櫻はまだ蕾をも結ばねど、寂しい浮世に、何時も花見て暮らさうとする、長閑な人を集めてゐる。五號館は、油繪展覽會と青年日本畫會とが軒を並べて、其れ〴〵相當の客を呼んでゐる。日本畫會は將來有望の青年畫家の團體で、每春の展覽會は彼等が一年一度の晴れの場所。月桂冠と黃金の報酬。其の出來榮次第で得るに難からぬ例もあれば、誰れも皆相當に力量を盡した製作を出品するのであるが、今年は別けて傑作の陳列されてゐるとの噂。

天平式の裝飾を凝らした門を三々五々連立つて入つたのは、何處かの私立大學の學生。習ひ覺えた審美學の應用を試むるはこの時と、古今の學說を引いて、ぎやう〳〵しき批判を下す者もある。默つて其の美に見惚れてゐる者もある。順順に覽渡して、最後に七つ八つの大作の別に一區域を造れる中に立つて、今歲の名畫はこれと稍ゝ念入りに鑑味しようとする。

「湯本竹園の『初陣』、この人が去年金牌を取つたのだな。封建武士の『初陣』だが、實に健げに出來てゐる。色彩の配合も見事だし、顏面の表情が巧みだ。今年もこれが一等だらう。」

「いや、川田春波の『若人の夢』の方が勝つてゐる。着想が

非凡ぢやないか。しかし賣價二百圓とは驚いたね。」

「それから北川秋草の『浴後の美人』加藤香山の『弘法大師』新聞の評判ほどぢやないね。……それから左の端のは誰れのだい。……や、隨分大幅だ。澤谷雪堂の作か。畫題は『召集』だな。常に似合はん平凡な名をつけたものだ。……でも、よく見てると何處か非凡な點があるやうだね。湯本のよりも俗氣がなくつていゝ。僕はこの人が却つて竹園よりも大成すると思ふ。」

「それはどうだか分らん、がまづこの四五人が將來の美術界に雄飛するのだらうよ。」

彼等は怪しげな術語(テクニック)を混ぜて、あたり憚らず高聲に批評し合つてゐる。縱覽者は外を素通りしても、この二三の大作の前には足を留めて、かの一群の學生を取卷く。

「どうも人物は油繪に限る。」鼻目鏡の洋服紳士が呟く。

「隣のを見て此處へ入ると、どれも皆不自然だから面白くない。」中學の制帽を戴ける少年が友を顧みていふ。

「あの兵隊は、えら作造どんの悴に似てるだよ。」赤毛布(あかげつと)が眼尻を下げて微笑んで、連れに話しかける。

「上手だわね。子供の顏がほんとにいゝわ。」蝦茶袴は蝙蝠傘に兩手を乘せて、暫し見惚れてゐる。

「その左の端が私のですが、ほんの間に合はせで、繪にはなつてゐないです。」

丈高き青年が痩せて青白い顏を、さつと赤くして、稍ゝ俯目になつて、頰髯いかめしけれど、顏付柔しい肥滿せる紳士に向つていふ。紳士は目を其の方へ移して、二足三足すゝみ寄つて、

「なある程、『召集』といふ畫題だな。」頭を上から下へ、右から左へと動かして、全幅を微かに見てゐたが、「實にいゝ出來だ、申分のない作だ。湯本のも惡くはないが、色合が派手過ぎる。私はこの方が勝つてゐるやうに思ふね。」

一心にこの紳士の顏を見てゐた青年は、自から心臟の鼓動するのを覺えた。

「背景が狹くるしくつて畫面が引立たんのです。」仰向いて元氣よくいふ。

「さうでもなからう。」

「湯本さんのよりもよう御座んすわねえ、父樣(とうさま)。」紳士に沿うて立てる高島田の少女が小聲でいふ。澤谷は電氣にでも打たれたやうに感じて、思はず顧みると、少女は涼しい眼で無心に己れを見てゐた。湯本のよりも優る。この一言は澤谷を苦悶から救ひ出す大慈愛の聲である。彼れは湯本を及びがたい天才と日頃羨んでゐたので、彼程(あれほど)の手腕がないといふ自信が、無意識に其の煩悶の一端を造つてゐたのである。展覽會場に相列べて、公衆の前に彼れの妙技と己れの拙技とを曝らして、無慈悲な批評を受けるは、名譽心强きこの青年には堪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com